

ポスターNo. 12

下関地域における日本語指導の理解と支援のための出前研修

平田 歩 (梅光学院大学)

當房詠子 (同上)

実施機関	梅光学院大学
授業名・研修名	平成 30 年度 日本語指導 “出前” 研修
対象 (人数等)	学校等教職員、ボランティア希望者 3~27 名
授業・研修の 目標	小中学校教員、地域ボランティア、保護者等で、子どもの日本語指導に関心のある方を対象に、外国人の子どもやその保護者との接し方、日本語の指導法について考える場を持つことで、子どもの日本語指導への理解を図る。
参考にしたモデルプログラムの番号	① ③ ⑧ ⑩ ⑪ ⑫ ⑰ ⑲

<実施状況と成果>

①研修の実施計画

外国人散在地域の下関市では、外国人児童生徒等の在籍も少なく、日本語指導員は 2016 年度に 1 名配置されたが、翌年から再びゼロとなった。ほとんどの学校の教職員が外国人児童生徒等と接した経験がなく、日本語指導はもちろん、コミュニケーションの取り方から悩んでいる現場もある。そこで、発表者 2 名による取組として、小中学校教員や地域のボランティアに関心のある人を対象に、外国人児童生徒等やその保護者との接し方、日本語の指導法について考える「日本語指導ワークショップ」を 2016 年度より試みた。市教育委員会にも広報等の協力を求めたうえで、学校教員が参加しやすいよう夏休みを利用し、8 月前半の 3 日間と後半 2 日間の合わせた 5 日間で実施した。同時に児童生徒対象の「夏休み日本語教室」を並行し、日本語教育を専門とする大学教員や学生ボランティアが子どもたちの日本語指導や夏休みの宿題を手伝うという実際の指導の様子を見学できる場も設けた。しかし、1 回 120 分の講座を 5 日間受講するという事は学校教員には現実的に難しかったため、2018 年度は各学校等へ出向きそれぞれの現場の状況に合わせたテーマで行う「出前研修」の形を取った。研修内容は個別の要望に合わせて 120 分とし、3 名以上での受講とした。

応募のあった 7 団体 (6 会場) は、中高一貫校 1、中学校 1、小学校 2、任意団体 1、教育・保育施設 2 で、受講人数は団体ごとに 3 名から 27 名と幅があったが、合わせて 58 名であった。要望のあったテーマは「当該児童の指導・支援方法」「外国人保護者とのコミュニケーション方法」「保護者支援について」等で、また、個別の指導法についての要望もあり、「モデルプログラム」を組み合わせることで、必要な部分は共有しながら個別のニーズに応えた。

研修内容は次の 4 つのテーマを柱に、各団体の状況や要望に応じて必要なモデルプログラムを取り

入れた。

(1) 市内の外国ルーツの子どもたちの状況を知る

①外国人児童生徒教育の考え方（「外国人児童生徒等」とは／「日本語指導が必要」とは）

③外国人児童生徒等受け入れの現状と施策（県内、市内の在留外国人統計／県内、市内の受け入れと対応状況について／義務教育に関する法律）

(2) 必要な日本語支援について考える

⑩認知発達と言語習得（第二言語習得のプロセス）

⑰日本語指導の理論と方法（日本語指導の方法／実際の日本語指導例／教材の利用と作成／学習支援サイトの紹介）

⑲言語能力の把握（生活言語と学習言語の違いと習得／日本語レベルの判断方法・「DLA」の実施方法／教科学習に必要な日本語について考える）

(3) 子ども、保護者の対面する困難について考える

⑧保護者との連携（保護者の実際の声から／先生とのコミュニケーション／園、学校からのお便り／活用しやすいリソースの紹介）

⑪母語・母文化・アイデンティティ（母語の保持／家庭での言語環境／多言語絵本の紹介）

⑫外国人児童生徒等の心理と適応（文化や宗教への配慮／教職員の心構え）

(4) 「やさしい日本語」について知り、体験する

*モデルプログラム無し（「やさしい日本語」とは／「やさしい日本語」練習／学校での専門用語をどう言い換えるか）

②実施時の受講者の参加の様子

受講者は現職者や教員経験者であったが外国人対応は初めてであったため＜基礎＞項目を主体としたが、初めて聞く内容に驚きと戸惑いの様子であった。また、下関市では支援員がつかず、児童生徒の対応や指導はほぼ担任に一任されるため、個別の日本語指導や教科指導にまで考えが及ばないという団体では、保護者対応についての質問が多かった。保護者の日本語力が不高くないために行き違いの生じることが多いと考え、モデルプログラムにはない「やさしい日本語」についての内容をすべての団体での研修に取り入れた。話し方や書き方に気をつけることで保護者とのコミュニケーションが円滑になるだけでなく、子どもの指導の際にも教材のリライトなどを意識することができるようになるため、研修には必須の項目と考える。

③成果（目標の達成の度合い等）

終了後のアンケートでは、「大変ためになった」「内容がよく理解できた」「希望に添った内容だった」と好評であった。市教育委員会の研修が行われず情報が何もない状況の中で、「学習支援サイトや様々なリソースを利用したい」「コミュニケーションが取りやすくなるよう少しでも意識したい」などの感想があり、2学期以降に活かされる望みにつながったかと思われる。

④課題

受け入れのある学校にのみ個別に対応できる「出前」の形はよかったが、受け入れのない学校では関心も持たれないままとなる。日本語指導と教科の指導、多文化理解についてはさらに具体的な内容を、多くの教員が学べる機会があるとよい。